

保健学研究科

多職種協働による子どもの育ちと親支援事業－看護-リハビリテーション連携による子育て中の母親のレスパイトケア－

担当学科等 看護学講座
担当者 常盤 洋子教授

◎事業概要

本事業は、保健学科学学生(看護学専攻、作業療法学専攻、理学療法学専攻)および保健学研究科の教員と大学院生が看護学とリハビリテーション学の専門性を発揮し、看護-リハビリテーション連携による育児ストレス・育児疲労に対するレスパイトケアを通して様々な子どもの育ちに対応した母親役割遂行を支援し、多職種連携による乳幼児虐待予防に貢献することを目的とする。

◎実施事業等

1) 母親レスパイトケア事業実施

本事業は、1～2ヶ月に1回開催され、計3回実施した(10/29、12/3、3/5)。本事業は3つのプログラムから構成された(資料1)。具体的には、①リフレクソロジーでリラックス、②癒しの作業療法、③おしゃべりタイム。

参加者は、乳幼児を育てている母親が延べ22名(平均7.3名)、0歳～5歳の子ども延べ28名(平均9.3名)、父親延べ8名(平均2.7名)、学生ボランティア延べ24名(平均8名)であった。

本事業の1～3回の評価について5段階評価による満足度についてアンケートを実施した(資料2)。その結果、①リフレクソロジーでリラックス及び②癒しの作業療法は、どちらも1～3回すべての回で満足度5、③おしゃべりタイムは平均4.9であった。母親・父親の全体の評価は1～3回においてすべて5であった。学生ボランティアは1～3回すべてにおいて5であった。

参加者からのコメントを以下にまとめた。①リフレクソロジーでリラックスでは、とてもリラックスできた、自分の癒しの時間が十分確保できた。②癒しの作業療法では、楽しく作品作りができ、作品ができた達成感もあり、ストレス解消になった。③同じような悩みを持つお母さんと話したり、専門家に相談できてよかった。④遊び場コーナーで学生と専門家が子どもと遊んでくれたので、安心して自分の時間を持つことができた。また、子どももとても楽しそうに遊んでいた。

2) 看護-リハビリテーション連携

本事業開催にあたって2回の運営会議を開催し、母親のレスパイトケアの意義と運営方針を共有して連携を持ちながら事業の成果を上げることができた。

3) 参加した学生の学び(資料2)

参加した子どもとの触れ合いを通して成長・発達に関する知識を統合することができた。また、子育て中の母親や父親の不安や悩みを知ることができ、親のレスパイトケアの重要性を理解することができた。

4) 講演会「子どものころを育てる親子の絆」を実施(資料3)

子育て中の母親や父親、母子保健に携わっている助産師・保健師・看護師、保育士、教員等を対象にアタッチメントに関する講演会を実施した。117名の参加があった。講演会の総合評価は、やや満足・満感が合わせて81.4%を占めた。

5) 本事業に対する要望

参加者全員(母親・父親)から本事業の継続の要望があった。また、本事業が有料でも参加したいという意見が聞かれた。

◎期待される成果

1) 乳幼児をもつ母親の育児ストレスの解消と育児の孤立化を防ぐことができた。

本事業に参加した全員から、レスパイトケアのプログラムに参加することによって自分の癒しを得ることができ、育児ストレスが解消されたとのコメントが得られた。また、参加者同士が自主的に連絡先の交換や一緒に食事に行くなど交流がもたれるようになり育児の孤立化を防ぐことができた。

2) 看護-リハビリテーション連携による母親支援によってそれぞれの母親の健康課題に応じた母親役割遂行を支援し乳幼児虐待のリスクを取り除くことができた。

母性看護学・地域看護学・在宅看護学の教員が参加者の健康課題を共有し、それぞれの立場から育児ストレスや子育てについての不安や悩みについて傾聴し、必要と判断された事項について助言をすることによって参加者の暮らしを見据えた母親支援をすることができた。そのことによって参加者からは育児におけるイライラについて多職種の専門家に話を聞くことができ、日常の中での子どもとの向き合い方やイライラへの対処について落ち着いて考える機会が得られたとの声が聞かれた。

3) 保健学科学の学生が子育て中の母親の育児状況をふまえた多職種連携協働による母親支援における専門的知識と技術を修得し臨床現場への活用を学ぶことができた。

学生は参加した子どもたちとの遊びを通して日常の中での育児の状況に触れることができ、母親支援におけるレスパイトケアの重要性を理解することができた。また、母性看護・地域看護・在宅看護の看護-看護連携や作業療法を取り入れたレスパイトケアの実際に参加することによって多職種連携の実際を学ぶことができた。

4) 講演会「子どものころを育てる親子の絆」を実施したことで、親と子育てをサポートする専門家が子育てにおいて基盤となる親子の絆(アタッチメント)に関する知識を共有することができた。